

AAPフォーラムから ③

パネルディスカッション ④



常川氏



古島氏

基調講演の次に「アジアでメイド・バイ・ジャパンを進化させる」をテーマにしたパネルディスカッションを実施した。アパレル生産のサプライチェーンに関わる多様な企業が登壇した。冒頭、司会の和田氏が日本のアパレル生産は中国からチャイナプラスワンへと移行し、ASEAN（東南アジア諸国連合）のなかでもフィリピンへの注目が高まっていることを紹介した。その後、各社の現状が語られた。

縫製工場は中国以外の生産国の比率が高まっている。サンテイはベトナムやラオス、インドネシア、バングラデシュなどに進出し、生産国比率は金額ベースで11年は中国が90%だったが、18年は60%の見込み。中国は重衣料が多く、高機能の設備の移転はそこまで進んでいない（常川氏）。バングラデシュやミャンマーのほか、今秋にはフィリピン・マニラで工場を操業させる小島衣料は、10年は数量ベースで中国が100%だったが、18年は15%となる。「ニーズに応じてきた結果と中国工場の変遷のタイミングが重なっている」（石黒氏）とする。

検品加工のファッションクロスフルシマも、検品の生産国比率がASEAN

ASEANシフトが顕著

Nへシフト。11年は中国が94%、ASEANが6%だったが、18年は中国36%、ASEAN64%とみる。「カンボジア、インドネシア、バングラデシュなど商品を保税エリアから持ち出せないケースが多く、出張検品が増えている」（古島氏）とする。

国際物流の大森廻漕店は、生産国への資材輸送の比率が、日本からASEANが20%、中国からASEANが60%、その他の国からASEANが20%。「南西アジアからの輸送が増えている」（山崎氏）。

こうした動きに合わせて、服飾資材卸の清川はベトナムのホーチミンやハノイ、ミャンマーなどに拠点を持ち「副資材の現地調達化100%を目指す」（清川氏）、服地コンバーターのサンウエルは「タイやベトナムに進出し、テキスタイルをストックしている」（安永氏）と語った。

〈パネリスト〉

- サンテイ社長 常川雅通氏
- 小島衣料社長 石黒崇氏
- ファッションクロスフルシマ社長 古島一男氏
- サンウエルテキスタイル販売第1事業部事業部長執行役員 安永徹三氏
- 清川専務取締役 清川信雄氏
- 大森廻漕店国際本部副本部長 山崎豊氏
- 〈司会〉
- アジア・アパレルものづくりネットワーク理事・事務局長 和田博氏

パネルディスカッション④ 中国とは違う苦勞

AAPフォーラムから ④

パネルディスカッション ④



清川氏



石黒氏

ASEAN（東南アジア諸国連合）や南西アジアへの進出がなければ「撤退の一途をたどっていただろう」とする一方で、文化や宗教、民族なども大きく異なり、インフラも発達していないため、「中国とはちがった苦勞がある」と各社が口を揃えた。

中国と同様に人件費の高騰や人出不足が起きているとするのはサンテイや清川だ。「ベトナムは毎年ペースアップが必要なのでゆくゆくは辛くなる。また優秀な人材はITや自動車に流れている」（清川氏）。「特にラオスは工場が定着せず本当に苦勞する。早ければ数日、長くても1、2カ月で辞めるケースが多い。500人採用するのに2000人以上の面接が必要だった。定職に就くという価値観があまりないのが要因」（常川氏）という。

中国とは違う苦勞

中国と違った問題を抱えるのがバングラデシュだ。同地に縫製工場のある小島衣料とサンテイは、「今年のゴールデンウィークに突如、来料加工から進料加工に貿易形態の変更を当局から指示されて混乱した」（石黒氏）という実態を紹介した。

またバングラデシュのほかインドネシアなど東南アジアは、イスラム教徒が多いため宗教による制約もある。大森廻漕店は「ピークである金曜日はイスラム教の休日にあたるのが悩み」（山崎氏）。

ベトナムやタイに拠点のあるサンウエルは「メールの返事がなかったり、値段を聞くのに5日かかったりと、ビジネスにスピード感がない。工場を訪問しても生地見本や資料がなく素材開発に時間がかかる」（安永氏）という。

出張検品が多いファッションクロスフルシマは「工場に行っても商品がまだできていないことも多々あり、人件費ロスが発生している。識字率が低く人材教育も課題だ」と話した。

そのほか、インドネシアの「アングターフル」への対応の難しさや、東南アジア・南西アジアに共通して不透明かつ複雑な通関事情についての悩みが共有された。